

日本のホスピタリティを世界に

～人や地域がつながって、新しい価値が生まれる瞬間に立ち会いたい～

レストランやホテルなどにパンの製造や卸しを行う企業を経営する一方で、宇治茶の産地である和束町と深く関わり、日本のお茶の文化とインバウンドビジネスを結びつけようと文字通り東奔西走する(株)リバーフィールドの山岡和美さんにお話を伺いました。

——これまで2回訪中団に参加されていますが、どんな目的で参加されたのですか？

今後中国は、世界の食文化に大きく影響を与える存在になるだろうと思っていたのと、サービス業、特にホスピタリティ産業が重要なキーワードになってくるだろうとも思っていましたので、それを見ることができれば参加させていただきたいと思ったのが、理由の一つです。

また、もともと同友会への入会理由が、多くの経営者の方々とお話をしたいということでしたので、訪中団は日本の経営者だけではなく、中国で活躍されている経営者の方々からもその意見やお話が直接聞くことができます。これもまさに私の求めることでしたので、参加させていただきました。私にとってこの二回の訪中は、とても有意義で、勉強になっています。

——最近は、パンだけではなく、お茶の事業にも関わられているそうですね？

宇治茶の産地である和束町と深く関わるようになったのがきっかけで、お茶に関するビジネスにも関わるようになりました。もともと海外からのお客様を観光に結びつけるということで、前職（ヨーロッパ専門の旅行会社で旅行の企画・添乗など）の経験を活かした立場から関わっていたのですが、私の会社の販路にたまたまお茶に関する商品を乗せることができたのです。お茶に関する事業を通じて、日本の文化や風習を海外の方々に知っていただくことで、日本の美しい自然や文化の継承に少しでも役に立つことができればと思い、取り組ませていただいています。

——具体的にはどのようなことですか？

和束町の茶畑が作り出す美しい景観は、お茶をつくるという産業が創りだした景観です。ですので、お茶の良さをたくさんの人に知っていただいたり、買って飲んでいただくことが和束町の美しい景観を守り、そしてお茶の文化を継承することにつながります。

日本でも、2020年の東京オリンピックに向け、国をあげて観光に力をいれてきています。お茶に関連する商品やサービスなどあらゆるものを見直し、価値あるカタチにしていくいいタイミングなのではないかと考えています。



(株)リバーフィールド 山岡 和美さん



昨年、米国カリフォルニア・レーズン協会が主催する「ペーカリー新製品開発コンテスト」において大賞を受賞。この商品にも、和束町のほうじ茶が使用されています。

——今後はどのような展開をお考えですか？

私は今、私や私の会社に関わることで、いままでなかった価値が生まれることがとても楽しいと感じています。そしてそこにやりがいも感じるようになってきています。

互いに共鳴した誰かと一緒に取り組むことで価値あるモノを作り、結果を得る。そこで、互いの利益を生んでいければと考えています。それは社外に限らず、社内でも一緒です。

今、会社として「食べたら健康になるパン」というテーマで様々な取り組みを始めています。これは、栄養学的にみて身体にいいというだけではなく、食べたら、心も健康になるという意味も含んでいます。昨年まであった弊社のアンテナショップの名前が「RIRE」（リール）というのですが、フランス語で「笑顔」という意味なんです。『心が、晴れの日も、雨の日も、リールのパンがあれば笑顔になれるね』というのがコンセプト。

そんなパンを作ることが、人と人の出会いにつながり、そこで生まれる価値が、みんなを「笑顔」にする。それが、街づくりであったり、商品開発であったり、パンづくりであったり、そして人々の健康のもとになったり。そんなビジネスがしていきたいですね。

インタビュー：日中経済交流研究会 広報委員会

坂元正三（坂元鋼材株式会社）

大山武久（大山印刷株式会社）

野村明宏（株式会社電研社）

まとめ：合田耕作（株式会社ギャレークルー）